＊評価は，1：十分にできている 2：概ねできている 3：どちらかというとできていない 4：できていないの4段階評価 （各指標の数値については，小数第2位で四捨五入）

評価項目	本年度の活動と指標	達成状況	評価	成果と課題（◎成果，▲課題）	学校関係者評価	来年度に向けた改善点
知の教育（確かな学力の育成）	○既習事項の復習等による学力の定着 （全国学力・学習状況調査【以下：学調】結果） ・国算：全国比98%以上 （学調結果の分析，取組検討） （学調分析結果の公表） ○主体的・協働的・深い学びへの授業改善 （児童アンケート結果） ・自分の思ったことや考えたことを進んで発表する：75%以上 ・算数や国語の勉強が好き：75%以上 （研究授業後の事後検討会の質の向上） （ICT機器の積極的活用による授業改善） ・児童用端末を活用した授業週1回以上 ○読書習慣の定着 （児童アンケート結果） ・読書が好き：85%以上 ○家庭学習の充実 （10～15分×学年の家庭学習時間の確保） ・保護者アンケートでの肯定的評価80%以上	・学調結果（R4年度：全国比 国語99 算数97） ・学調結果を分析，具体的対応策を実施 ・R4度第1回みえスタディチェック結果（国語：県との差4.4 過去との差7.1 ）（算数：県との差-0.6 過去との差-9.9 ） 【（児童）進んで発表する：68→70】 【（児童）算数は好きか：74→75】 【（児童）国語は好きか：70→69】 ・学調分析結果を保護者，学校運営協議会に公表 ・研修理念について文章化し，職員で共有 ・各学年の校内授業公開，事後検討会の実施 ・校内研修会で，語彙力向上の取り組み，漢字指導の方法の交流 ・「お家で読書」等の取組や巡回指導員，読み聞かせボランティアの活用 【（児童）読書は好きか：85→83】 【（児童）家で勉強や宿題をしている：92】	2	【学びの基盤づくり】 ◎視覚支援や動作化，意欲を支える評価等が効果的であった。 ◎学年での教材の共有や，学習規律，聞き方・話し方等全体での共有ができた。 ◎聴くことを大切にした学級経営や日記・IINOTE等で書く活動の系統的な取組を進めた。 ▲「話す・聞く」「読む」も，系統的に積み上げたい。 ▲高学年の「5分前行動」の取組は効果的であったが，粘り強く指導を継続する必要がある。 【全国学力学習状況調査・みえスタディ・チェック】 ◎「言葉のたからばこ」等の活用により国語力・語彙力の向上が見られた。 ▲算数では，解答に至るまでの説明や，問題文から解答に必要な情報を取捨選択するところに弱みが見られる。国語では，「書く」領域に弱みが見られる。 ▲全体的に，題意を正しく理解し解答につなげる点に弱みが見られる。 【主体的・対話的で深い学びのある授業づくりに向けた校内研修】 ◎授業公開および事後検討会等で成果や課題を共有し，各自の実践に活かすことができた。 ▲コロナ禍の中，全職員が一同に参観することは難しく，ビデオ視聴も活用した。そのため，協議時間の確保が十分にできなかった。 【ICTの活用】 ◎日常的に活用することで，高学年では表を見ずにローマ字入力できる子が増えた。 ◎ICT機器の活用により，特に「書くこと」に課題がある児童の苦手意識の軽減や学習意欲の向上が見られた。 ▲学習と関係のない操作をしている姿も見られる。見回り等細かな指導の必要あり。 【読書の推進】 ◎毎週月曜日朝の「全校読書」，「お家で読書」等の取組が読書時間の確保につながった。 ◎並行読書の取り組み，巡回指導員によるブックトーク，図書祭りの取組（図書委員による読み聞かせ，ビンゴカード，ブックビース）は，児童の読書意欲の向上につながった。 ◎ボランティア，巡回指導員と連携した読書環境の整備を行った。 ◎貸出冊数を9月から1人2冊に変更したことで，貸出冊数の増加につながった。 ▲学級文庫の充実 【家庭学習の充実】 ▲家庭の協力が得やすくなるよう，課題の内容の検討等を進める必要がある。	・みえ・スタディチェックについて，各設問の正答率を検証していきたい。 ・基礎基本の定着に向け，特に必要な学年の読解力・文章にまとめる力・コミュニケーション力等の育成に向けた取組を進めるとよい。 ・話す力や読み取りの力について具体例等から教えるとよいのでは。語彙力の向上は見られるが，子どもたちが端末に打ち込む様子から発音を誤認していることがうかがわれた。 ・個々の状況に応じた学習が可能になるので，算数少人数授業は続けてほしい。 ▲コロナ禍で，学習面に個人差が大きく出ていると思われる。また授業に集中できない児童が気になる。 ◎プロジェクターの活用は，視覚に訴え理解しやすい。また，低学年からPCに触れることはとてもよい。 ・ICT活用や教科担任制充実・協働学習・少人数指導等の授業改善が進むとよい。 ・校内研修の充実により，教職員の指導力向上の取組がさらに進むとよい。 ・音楽会が開催され良かったが，楽器の演奏等まだ制約があり子どもたちから「さみしい」との声があがっていた。 ◎音楽会のメッセージ掲示は良かった。 ▲家庭学習については，家庭環境による差が大きく課題は多い。また，塾通いの子とそうでない子の差が出る。 ・学期に1回は授業参観があるとよい。 ◎読書活動を充実させる取組は今後も継続してほしい。 ・学級文庫にある古い資料や破損した本等を整理し「読みたい」と子どもが思える環境にできれば。 ・動画視聴が広がり読書離れが進んでいるように思われる。自分の興味関心に合う本があることに気づけるような手立てがあるとよいのでは。 ・欠席児童にオンラインで授業の様子を配信しているクラスもあった。	・みえ・スタディチェック，学調で弱みの確認された「書く」，語彙力向上について，継続して取り組んでいく。 ・感染拡大予防対策を講じつつ，グループ活動等様々な学習形態を取り入れた授業づくりを進める。また，さらなる授業力の向上に向けた効果的な校内研修会のあり方について検討を進める。 ・宿題等の家庭学習を進める際に，児童各々の学びにつながる家庭学習になるようICT機器の活用も含む課題設定の工夫を行う。 ・授業中集中が途切れがちな児童や複雑な家庭背景をもつ児童等への学力保障に向け，保護者対象のアンケート実施や生活チェックシートの結果分析を通して，一人ひとりの生活背景等を踏まえた取組を検討する。 ・読書活動の推進に向け，学級文庫の充実を図る。また，そのための財源確保にむけPTA等とも協議を行う。
	○外部人材の活用 （学習支援ボランティアの活用と支援の充実） （支援の方向性についての方針の共有） （ボランティア活用計画の作成） ・年間計画の作成および共有 （外部人材の活用） ・各学年年1回以上	（1年）環境学習 （2年）三重執鬼・虎屋勝月見学，JA鈴鹿（夏野菜） （3年）県道工事現場見学，環境学習，スーパーサンシ見学 （4年）前川定五郎顕彰会，社会福祉協議会（アイマスク体験），伝統産業会館（伊勢形紙），環境学習 （5年）弁護士によるいじめ防止教室 （6年）弁護士によるいじめ防止教室，租税教室，絵本ばこさんによる平和学習	2	【学習支援ボランティア】 ◎地域コーディネーターと連携することで，安心安全で効果的な学習活動を進めることができた。 ◎学級担任は，ボランティアの支援があることで児童と関わる時間を生み出すことができた。 ◎三重県地球温暖化防止活動推進員を招聘して，環境学習を行うことができた。	◎外部人材の活用により子どもたちの関心・意欲が高まるように感じる。 ◎地域コーディネーターと担任等で連携し，概ね必要な支援を行うことができた。 ・学習ボランティアの積極的な活用がされるとよい。 ◎体験学習・外部人材を活用した授業等の取組は引き続き続けていけるとよい。	・引き続き，学習支援ボランティアの活用や地域教材の発掘，地域人材との連携等外部人材の活用を推進していく。 ・授業等を受け入れていただける企業・団体・商店等の新規開拓を続けていく。
	○外国籍児童への支援・多文化理解 （JSLバンドスケールの活用と取出授業） ・バンドスケール：1以上UP ・バンドスケール活用に向けた研修実施 （違いを認める教育実践） ・各学級1回以上 ・地域等との連携	〈バンドスケール活用と取り出し授業〉 ・バンドスケールについて，教育支援課職員を講師に全体研修会を実施した。 〈違いを認める教育実践〉 ・多文化共生教育の実践を，各学年で各学期1回以上実施。	2	【バンドスケール活用と取り出し授業】 ◎バンドスケールについての研修を実施し，日々の指導に生かすことができた。 ▲バンドスケールは，外国人児童の日本語で学ぶ力を測るツールのため，到達度を図る指標としては馴染まない。 ▲初期日本語指導の必要な児童が増加し対応が難しかった。 ▲国際教室での取り出し児童が増加し，異学年の児童を同時に指導する状況が増えた。 【違いを認める教育実践】 ◎5年生が社会見学（野外民族博物館リトルワールド）で学んださまざまな国の文化のまとめを校内に掲示することで，他学年にも興味関心をもってもらうことができた。 ▲コロナ禍で地域との連携が難しかった。	・外国籍児童に対応できる人員の増員が必要。また，行政・関係機関等との連携が必要。 ▲初期日本語指導の必要な子どもの学校での様子が気になる。 ▲JSL児童の状況が分かりにくいが，国際教室での取り出し以外に通常の授業内での支援が必要なように感じる。 ・EASとの交流が復活できるとよい。EAS内の売店で販売している料理やお菓子等を食べてみる経験も良いのでは。 ◎5年生社会見学（リトルワールド）は，子どもたちの声からも良い学びができたのではと感じた。	・外国籍児童へ必要な支援を行うため，関係機関との連携と合わせ学習ボランティアの活用も検討していく。 ・新型コロナウイルス感染症の感染症法上の5類への移行に合わせ，EAS等の地域にある施設との交流を再開させていきたい。
愛の教育（人権教育・特別支援教育・心の教育）	○自尊感情を高めるための仲間づくり，人権学習の取組 （児童アンケート結果） ・自分には良いところがある：85%以上 （人権学習の実施） ・県教委教材等の使用：学期1回以上 （道徳の実践研究） ○人権侵害・差別事象への対応 ○いじめへの迅速かつ適切な対応 （いじめアンケートの実施） （教育相談の充実） ○不登校傾向児童への初期対応，自立支援の充実 ・30日以上および10日以上欠席の児童数：昨年度から減少	〈児童アンケートの実施〉 ・「自分には良いところがある」に「はい」または「どちらかといえばはい」と回答した児童：86.1% 〈職員研修の実施〉 ・教科書無償化 ・人権レポート研修会 ・鈴同教レポート学習会 ・子どもの権利条約 〈人権学習の実施〉 ・新型コロナにかかわる差別事象の直後，全校で人権学習を実施。 〈いじめアンケートの実施〉 ・毎学期実施した。 〈不登校傾向児童への初期対応，自立支援の充実〉 30日以上および10以上欠席の児童数：昨年度と同数。	2	【人権学習】 ◎各学級や子どもの実態を具体的に把握し，課題解決のための実践を行い，それを夏季と冬季の2回，全教員がレポート研修することにより，取り組みの在り方について検討することができた。 【虐待・いじめ・不登校への対応】 ◎いじめアンケートをもとに教育相談等を実施し，問題の解決につなげた。 ◎友人関係で悩む児童や，不登校傾向にある児童の保護者等をスクールカウンセラー（以下「SC」）につなぐことで，教師以外にも相談窓口を作ることができた。 ◎不登校傾向にある児童について，現状の確認や状況の変化等を速やかに共有できる資料を整え，全職員での共通理解を進めた。 ◎教職員で連携した支援が進み，長期欠席児童が再び登校したり，教室で過ごせたりするケースができた。 ▲県作成の人権教育教材の使用による人権教育の推進が進まなかった。 ▲昨年度長期欠席していた児童の今年度の欠席日数が増えている。 ▲子ども家庭支援課や市のSSW（スクール・ソーシャルワーカー），SCなど，関係機関の連携が進まなかった。 ▲ケース会議・支援会議以外に関係職員で支援に向けた会議を定期的にもてなかった。	▲SCが常駐しているわけではないので，相談等はどうしても順番待ちになる。また，カウンセリング後のアフターケアは課題。 ◎一人ひとりの状況に応じた対応がされている。今後に向け，SC・SSW活用や地域人材の活用・教員の確保等が必要。また，「ホウレンソウ」の徹底や教職員集団のまとまりが大きなカギになる。 ▲文科省から「個別最適化の学び」が提唱されているが，十分環境が整わない中，学校だけで不登校等へ対応することは無理がある。 ◎今後も児童アンケート等を活用し，課題の早期発見早期対応をお願いしたい。 ・不登校の子どもも教育が受けられる工夫があるとよい。 ・不登校や「ヤングケアラー」等への対応は，学校だけで抱え込まず，福祉・教育行政や主任児童委員等とも情報共有した取組が進められるとよい。	・月1～2回のSCによる相談のほか，各担任や特別支援教育コーディネーター・通級担当・養護等が連携して児童を見守り，必要に応じて相談を行う体制を整えていく。 ・各担任や特別支援教育コーディネーター・通級担当・養護・SLS等の職員で連携し，教室に入りづらい児童や不登校児童傾向の児童への支援を継続するとともに，仮設校舎建設に伴う教室増を踏まえ，「わかば」「わくわく教室」以外の居場所の確保も進める。 ・子ども家庭支援課や教育支援課等の関係機関や，SSW等との連携を進める。